



報酬は1日5千円

8月上旬、りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)の産婦人科。岸和田市在住で妊娠中の謝丹丹さん(25)が「食べるとむかむかして吐いてしまう」と中国語で医師に訴えた。

通訳の郭静儀さん(49)が日本語に訳すと、医師が「無理に食べなくていいので、水分を十分取ってください」と答え、郭さんが中国語で伝えた。謝さんは近所の病院では中国語が通じず困っていた時、医療センターを紹介された。「細かい

日本語ができない患者が安心して治療を受けられるよう支援する医療通訳の活躍が期待されている。日本を訪れる外国人が増え、2020年の東京五輪開催を控えて需要が高まるのは確実だ。積極的に取り組む病院があるほか、国や東京都も対応に乗り出した。

## 外国人への医療通訳対応

# 訪日客増、五輪に備え



看護師(右)から体の仕組みについて説明を受ける野口徹宏さん=8月、大阪府泉佐野市のりんくう総合医療センター

質問にも答えてもらえるの「安心」とほほ笑む。

通訳は医師にとっても重要な。同センターでは65人の有償、無償のボランティアが活動。国際診療科部長の南谷かおりさんは英語やスペイン語でも診察するが「正確な診断や患者が理解しているか確認するには通訳が欠かせない」と話す。

センターで通訳に支払われる報酬は1日5千円と交通費。「さらに高い報酬と身分を保障する仕組みが必要」と南谷さん。

「足さず、引かず」

法務省によると、在留外国人の数は約200万人(13年末)。政府観光局の集計では、13年に日本を訪れた外国人旅行者は1千万人を突破した。厚生労働省は本年度、全国10病院で英語、ポルトガル語、中国語の通訳の採用に半額を補助するモデル事業を実施。東京五輪開催までに30病院を定、看護師や薬剤師ら8人が案内役と患者役に分かれ

て練習した。オーストラリア人講師は「身ぶりも交えると、伝わりやすい」と助言した。

医療現場での通訳は高い語学力やとっさの機転が求められる。医療機関に通訳を派遣するNPO法人多言語社会リソースかながわ(横浜市)は言語別に2カ月に1度の勉強会を開き、レベルアップを目指している。事務局の高山喜良さんによると、通訳の基本は「足さない、引かない」。がんの告知や難しい手術の説明はベテランが担当する。

りんくう総合医療センターでポルトガル語の通訳をする野口徹宏さん(67)は、ブラジル勤務時代、子どもが病気になる、現地の医大生に助けられた恩返しのため通訳を始めた。間違えうと大変なので、専門用語は必ず医師から説明を受けている。緊張するが、感謝されるとうれしいと話した。